愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第43号　2018.3　69-86

思考力・判断力を育てる歴史の授業
―1904年セントルイス万博と「人間の展示」―

History class that cultivates thought and judgment
―1904 St. Louis World's Fair and “Human Exhibition”―

楠　元　町　子
KUSUMOTO Machiko

キーワード：セントルイス万博、歴史の授業、「人間の展示」

１．はじめに

万博は、1851年ロンドンで「全人類が現在までに到達した技術、産業、文化を示す」[1]という意義の下に開催されてから、その時代の世界像を示してきた。1889年のパリ万博以降、自国の植民地の物品を展示するだけでなく、会場内に「植民地集落」が再現され、社会進化論に基づいて人類が序列化された。1904年セントルイス万博では娯楽街Pike、人類学部門、フィリピン村の三ヵ所でこれまでの万博を大きく上回る規模で、「人間の展示」が行われた。

セントルイス万博は、米国が1803年にフランス皇帝ナポレオン一世からルイジアナ州を購買してから百年経過したことを記念して、1904年４月30日から12月30日にかけてミズリー州セントルイスで開催された。セントルイス万博は日露戦争最中に開催され、ロシアは参加を取り消したが、日本は米国との関係を重視し厳しい財政のもと参加を決断した。日露戦争は黄色人種でなおかつ非キリスト教国である日本というアジアの国が、白人キリスト教国と堂々戦う初めての戦争であった[2]。

アジア・アフリカ諸国が欧米列強に植民地化され、日本が近代化を強力に進めることで、欧米列強と並ぼうとしていた20世紀初頭の世界の国際関係、文化、経済を具体的に考察する教材としてセントルイス万博を取り上げたい。

セントルイス万博に関する主なる研究は、日本の美術品を分析した志邨の論文[3]や「アイヌ人」の展示に着目した宮武の論文[4]、セントルイス万博の展示物や日本政府開催の祝宴を日露戦争との同時性から考察した伊藤の論文[5]、筆者のセントルイス万博に関する論文[6]がある。

本論文は、セントルイス公立図書館所蔵のセントルイス万博に関する新聞雑誌記事を集めたスクラップブックや日本政府のセントルイス万博の公式史料、日本の新聞記事等を考察することで、20世紀初頭の世界と日本の状況を理解し、当時の世界を資料に基づいて思考・判断する授業を提案する。教員を目指す学生に、教材に関する知識や資料の収集方法を示し、児童生徒の発達段階に合わせた資料を選択し、「主体的で対話的で深い学び」が出来る授業力を育成したい。

２．歴史教材としての万国博覧会

現在中学校、高等学校で行われる歴史は、「日本史」「世界史」に分かれ、次のような問題点が指摘されている。「日本があまり出てこない『世界史』と、世界があまり出てこない『日本史』をわれわれは学んでいる。われわれは二十世紀の世界において日本がどのような役割を果たしてきたのか、バランスのとれた視点を持つことが困難なのだ。」[7]

高等学校「地理歴史科」では、新必修科目として「歴史総合（仮称）」「地理総合（仮称）」新選択科目として「世界史探求（仮称）」「日本史探求（仮称）」「地理探求（仮称）」へと大幅な変更が予定されている。「歴史総合（仮称）」については、①世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代の歴史を理解する科目②歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する科目③歴史の大きな転換に着目し、単元の基軸となる問いを設け、資料を活用しながら、歴史の学び方(「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得する科目としている[8]。歴史総合は、資料に基づいて近代を中心に学び、現代の問題の背景を考え、解決方法を考える教科と言える。

2020年度学習指導要領中学校の歴史分野は、「近代の日本と世界を大観し、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること」[9]を重視している。歴史の大きな転換点として、本論文では日露戦争を取り上げる。日露戦争は日本とロシアの２国間戦争と言うよりも、欧米諸国、アジアを巻き込んだ戦争である。日露戦争や当時の世界の状況を具体的に理解する教材として、セントルイス万博を活用する授業を提案したい。

セントルイス万博が開催された1904（明治37）年には、アフリカは欧米諸国によってほぼ分割されており、アジア諸国も植民地化されつつあった。日本は、巨大なロシア帝国と戦争を開始し、欧米諸国に連なる国として評価を得ようとしていた。そのような世界の状況を如実に表していたのが万博であった。非白人の国はどのような目で見られていたのか、現在にもつながる人種差別について考えさせたい。セントルイス万博の公式記録や、当時の日本と米国の新聞記事を考察することで、世界の転換点を具体的にイメージする授業が出来ると考える。児童生徒に写真や新聞記事という一次資料を豊富に見せることにより、多くの資料から思考し判断し、歴史を多面的に見る目を育成する。

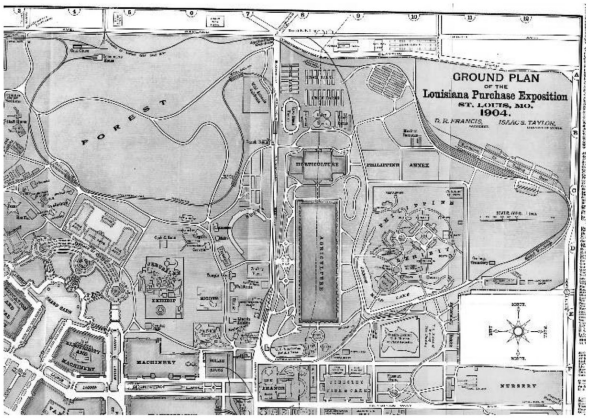
３．セントルイス万国博覧会

１）セントルイス万国博覧会の概要

セントルイス万博は、1904（明治37）年４月30日から12月30日にかけて開催され、44カ国が参加し、会場面積514ha(大阪万博330ha、愛知万博173ha）の会場内に1576の建築物が並び立ち、会場内を走る鉄道は21kmに及んだ。この敷地内に、教育、美術、心芸、工業、工芸、機械、電気、通運、農業、園芸、採掘及治金、林業漁業及狩猟、人類学館が建設された。教育万博と呼ばれたセントルイス万博は、万博史上初めて「教育館」を建設するなど、教育の重要性に着目した万博であり、世界各国の教育の実態を示すとともに、未開人と教育された人間の比

較もなされ、教育の成果を視覚的に提示した。

また、「PIKE」と呼ばれた娯楽街では、アルプスの村、ボーア戦争、動物園、世界の創造、巴里、日本村、珍奇亜細亜、カイロ、支那村、シベリア旅行汽車などが建築・展示され、多くの入場者を集めた[10]。



（図1　MAP OF THE LOUISIANA PURCHASE EXPOSITION）

2）各国の政府館と展示品

万博では建築物自体が展示品であった。参加国44カ国のうち政府館を建設したのは、アルゼンチン、オーストリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、セイロン、中国、キューバ、フランス、ドイツ、英国、グアテマラ、オランダ、インド、イタリア、メキシコ、ニカラグア、ペルシャ、シャム、スウェーデン、日本の計21カ国であった。政府館は各国が自由に自国をアピールする貴重な機会の場であり、参観者は今まで知る機会のなかった国々の文化・自然・産業を学ぶとともに直接異文化の人と接触する場であった。各国とも異国情緒あふれる政府館を建設し、展示物を説明するために自国民を派遣した。

ヨーロッパの国々は、イタリアがローマ時代の建物、フランスがベルサイユ宮殿の一部、ドイツがフリードリッヒ１世の宮殿の模造を建築し、自国が最も輝いていた時代や文化を象徴する政府館を建築した。アジアの国々は、インドがイスラム教、シャムが仏教寺院を模造したように宗教色の強い政府館、南米諸国は宗主国スペインの影響が強い建築物、ベルギーやオーストリアのように斬新な建築様式を用いるなど、各国がどのような自国のイメージを参観者に示したかったのか如実に表している。館内の展示品も、ドイツが化学製品、フランスが美術品、中国は3000年の歴史を誇る古美術、アルゼンチンやメキシコは熱帯の豊かな農産物などを陳列し、以後の貿易に大きく影響を与えるような物品とともに、その国の特徴を参観者に認識させる効果を狙っていた[11]。

西洋風の建築物の中、“exquisite”と評され異彩を放ったのが中国と日本の政府館で、両国とも本国から大工職人を派遣し、その独特な建築方法や大工の服装は大変注目された。

3）日本の展示品と日本庭園

日本は11館に出品し、主な展示品は以下のようであった。

陳列館の名称	日本の展示面積	日本の主な展示品
教育館及経済館	5468	日本の教育システムを写真で紹介
美術館	7398	日本画、洋画、彫刻、七寶、銅器、漆器、刺繍、金銀器、友禅、陶磁器
心芸館	400	印刷機械（星新一が個人で出品）
工業館	2万6179	絹織物、製糸順序模型、生糸、織物、扇子、人形、竹細工、化学用諸器械
工芸館	4万9194	銅器、家具、陶磁器、七寶、象牙細工、屏風、刺繍、漆器、真珠、金銀器
機械館	不明	不明
電気館	1596	電信電話機、発電機、調綱帯、調帯
通運館	1万6046	大日本帝国地理模型、刺繍世界航路図、名勝彩色写真
農業館	1万0872	茶、醤油、菓子、素麺、落花生、ビール、水飴、砂糖、缶詰、樟脳
林業漁業及狩猟館	6948	経木真田、木材、毛皮、漁船模型、布海苔、寒天
採掘及冶金館	8078	採炭所模型、精練所模型、銅坑模型、精選所模型、石炭、各種鉱物標本

面積の単位は平方フィート、(『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』農商務省、第二編、354-358頁より作成)

日本は、政府館の敷地全体を日本庭園と称し、敷地内に御所風の本館や台湾館、金閣寺を模した喫茶店などを建築し、「高い丘の上に建つ日本庭園は独特の珍しい地形で造られ、博覧会で最も絵のように美しい風景の一つである。」[12]と米国人に賞賛された。日本庭園は万博内三大庭園の第一に推薦された。三大庭園とは日英仏の庭園で、英国は華麗、仏国は精練、日本の庭園は風雅と称された[13]。

日本の展示について、米国では次のように評価された。工芸館では、特に目を引いたのは日本陳列区域の入口であり、実物大で再現された日光寺の門である[14]。電気館では、日本の電気技術者は、発電機、動力、電話の組み立て方法や設計方法を欧米から徹底的に学んでいた。日本製品には、その装飾に独特の日本の特徴が現われ、日本のスクリーンと扇子を思い出させる[15]。

工業館では、日本が近代産業に向かっており「東京で作られた精巧な鋼鉄の機械の展示は、日本の前進を示している。」[16]と指摘された。日本の農業については、茶、タバコや進歩的な実験農場の展示が説明され、「醤油（日本のウスターソース）は、ピラミッドのように大量の樽がディスプレイされていた。さらに、持ち帰りができるように醤油が現代的なブリキ製の容器に入れられて用意されていた。実際、醤油の展示区域はアメリカのデリカテッセンのようだった。」[17]と評された。

日本の出品物全体の評価は「戦争の技術と平和の追求の両面において、日本は世界の中で地位を得ようとしている。これがセントルイス博での日本の展示の真意である。」[18]であった。

4．米国の報道に見る日本―日本イメージの形成―

1）芸者

芸者はたびたび新聞に写真入で掲載された。日本村で興行するために米国に渡った日本芸者による都踊りの一行は「ゲイシャ・ガールズ」と呼ばれて、万博の会場に到着した時から、服

装や習慣がアメリカ人の目を引いた。

芸者に対する米国での評価は、次のようであった。金閣寺を模したパビリオンでは、いろいろな色の着物を着た「ゲイシャ・ガールズ」は、小刻みに歩き、しとやかに、西洋の人々がめったに経験しない風味で、日本の香り高い土地から運ばれた美味しいお茶を呈した[19]。日本の万博委員が米国の新聞記者を招待した夕食会で披露された芸者の踊りは、「寓話的なシャレード・ジェスチャーで、すばらしいパフォーマンス。」[20]と絶賛された。日本村の茶屋で接待する芸者については、「ここへ来た見物人は、亜細亜の夢を見る心地がする。場所といい、給仕といい、三味線の音といい、香の香りといい、一つとして珍しくないものはない。」[21]と賞賛された。貴族院議員金子堅太郎が、セントルイス万博を見学した報告の中で、日本の着物を「高尚優美なる我婦人の服装」[22]と誇った。

日本の伝統を象徴するのが「芸者」であったが、日本の近代化を示したのが伏見宮貞愛親王であった。欧州の国々と異なり、王室の伝統がない米国では、長い歴史を誇る日本の皇室に対して関心が高く、伏見宮貞愛親王の行動が詳細に報道された。

（図２　PRINCE　FUSHIMI ENJOYS A DRIVE　THROUGH ST. LOUIS）

２）伏見宮貞愛親王と観劇―“The Daring of the Gods”―

皇族で陸軍大将である伏見宮貞愛親王は、セントルイス万博の観覧とルーズベルト大統領に日米友好を記した天皇の親書を渡すために、日露戦争の最中に米国を訪問した。当時日本政府は、日露戦争において米国が同じ白人であり宗教も同じキリスト教であるロシアに味方することを杞憂していた。そのため日本に好感情を抱いてもらう目的をもって、セントルイス万博での皇室の役割を期待した。また、日本が列強に連なる近代化された国として認知されるためにも、欧州の皇族と同様な扱いを受けることを重要視していた[23]。伏見宮貞愛親王は、1904（明治37）年11月９日にサンフランシスコに到着し、11月15日ワシントンでルーズベルト大統領と接見し、11月19日から24日までセントルイス万博を訪れ、その後米国内を旅行し、12月28日米大陸を辞去された。米国の新聞は、伏見宮貞愛親王を「軍人であり政治家であり、外交官である。」[24]と評した。

伏見宮貞愛親王がセントルイスで評判の日本の演劇“The Daring of the Gods”を観劇された時のことを、次のように報道している[25]。第三幕が降りた時、殿下は、主演女優のベイツ女史に会いたいと仰せになり、一行とともに、このベラスコ一座の人気者の楽屋に案内された。手島伯爵が通訳を務められた。殿下は、ベイツ女史が第四幕の出番の合図を受けるまで、この女優と会談された。ベイツ女史との会話の中で、殿下は、彼女の素晴らしい容姿に大いに驚い

たとおっしゃった。舞台の上ではあまりにも小さく見えたからである。「近づいて見ると、実際は、思ったよりずっと大きく、ずっとアメリカ人らしい方ですね。」と殿下はおっしゃった。「とても驚きました。失礼ながら、舞台の上では、日本人のように小柄に見えたものですから」。殿下は、ベイツ女史にお別れを述べられた後、友人と一緒にボックス席に戻られ、この劇のラストシーンの幕が降りるまで、興味深く観劇された。

3）“The Daring of the Gods”―演劇に見るジャポニズム―

演劇“The Daring of the Gods”は、第5幕から成る[26]。第1幕の最初は、トサンの君主の娘ヨサンが屋敷の庭で蝶を捕まえたが、手の中で死なせてしまう。地面に倒れた蝶をヨサンが見ていると、不気味な雷鳴がかすかに聞こえてくる。この詩的な出来事は、幸せな幼い姫に待ち受けている運命を象徴するもので、優美で美しく、無邪気な姫の人間性を「蝶」を使って表している。第1幕の次の場（第2場）は、トサン君主サイゴンの館の晩餐室の場面で、その日開かれる「千の歓迎の宴」の準備が進んでいる。そこでヨサンは客をもてなすために来た最高位の芸者ロージー・スカイに出会う。スカイは、芸者は愛に身を捧げる者であると言い、ヨサンと愛について語り合う。

第2幕「千の歓迎の宴の場面」で、サイゴンは賭博による借金をカラに返すという名目で宴を催す。カラは、刀は侍の命と考えて天皇の廃刀令を無視し、刀を持つ10人の男の集団を率いる無法者である。ヨサンは、幼いころから巫女(「神々の寵児」)として舞をしており、ある夜、神社から家に帰る途中、盗賊に襲われ、カラとその仲間に救われた。ヨサンはその時からカラを好きになった。トサン君主である父は、彼女の恋愛を認めず、戦争大臣ザックリの甥トンダ・タンジとの婚儀に備えるようヨサンに命じる。ザックリは、自分の手下にカラを待ち伏させて殺すと宣言する。

次の場面で宴にカラが登場する。ザックリはカラに罠を仕掛けていると警告する。カラは自分を好ましく思わない人がいるが「私は刀のために生き、私の刀で私は死ぬ。」と言う。ザックリの手下に襲われ、重傷を負ったカラをヨサンは自分の部屋に匿う。カラは以前ヨサンを救ったことを思い出した。

第3幕は、ヨサンの匿い部屋の障子の裏側で、40日後の出来事である。トサンの君主は天皇の使命で屋敷を離れている。カラの傷は癒えつつあり、健康と体力を取り戻すことができるよう、ヨサンがずっと看護していた。ある朝、二人は朝食の膳につき、自分たちの深い愛について語っている。

（図3　The Daring of the Gods）

第4幕は、ザックリはカラが屋敷から

出ていないことを確信し、屋敷を見張っていた。トサンの君主が戻ってきて、カラを屋敷から追い出す。カラはザックリの兵士につかまり、ザックリの宮殿に連れていかれる。ヨサンはザックリにカラの部下の隠れ場所を教えれば助けると言われる。ヨサンは拷問部屋のカラの姿を見て、隠れ場所を教えてしまう。

第5幕の最初の場面は、自由を得たカラが観音様を祀った廃寺の前の会合場所に急ぎ、仲間に加わった。この一隊の僧であるバンザが観音様の祭壇で祈っていた時、ヨサンがカラを追ってこの集合所にやって来る。突然、矢が放たれ、年少のサノが倒れ死ぬ。カラはヨサンが隠れ家を教えたことを知った。僧のバンザは、「彼女は我々の法や神のもとでは死んだ者とされるが、千年間天国へは行けない。」ヨサンは自分の罪に驚く。カラは最後の戦いに向かう。

最終幕の第2場は赤い竹の森にある最後の会合場所である。仲間全員をザックリの一味に殺されてしまったカラは、もう一度ヨサンに会う。ヨサンはカラに許しを請い、千年後に冥途の向こう側にある、最初の白い天国の片隅で待っていてと願う。カラは自分の短剣で自らを刺し、ヨサンを許すと言う。ヨサンは自害し、千年経った。最初の天国が現れる。空に浮かぶ雲しか見えない。でも、カラは、これほど時間が経ったのにまだ誠実に待っている。彼はヨサンに向かって腕を伸ばす。ヨサンは霧のように現れ、これほど長く彼女を拒絶してきた幸福の絶頂へと向かう。

この演劇では、マダムバタフライを連想させる蝶、芸者、侍、刀による自害、冥途と当時の米国が持っていた日本のイメージがすべて出ている。演劇に対してニューヨークタイムズ[27]は、「この公演は全体として、きわめて興味深く、この先何か月も、満員の観衆を楽しませ続けることは間違いない。今までに見た最も美しいものに近い。」と評価し、「ベイツ女史の個性は、これまでと同じくらい強く美しいものであるが、これほど多くの雰囲気の華やかさや情動的感情を出すことができる彼女の技巧が、演じている状況の子供っぽさによって拘束されている。」と述べている。すなわち、演劇は豪華で美しいが、主人公の行動は非常に子供っぽいのである。

19世紀末のパリで演じられた「日本女性」を研究している馬渕は次のように指摘している。舞台の上に登場する日本人は、きちんと考証されず間違いだらけであるが、観客もそのようなものを求めていない。「このような他者へのまなざしは、植民地的ステレオタイプの形成であり、実際に植民地として支配されなかったとしても19世紀の間はその力関係は平等からほど遠いものであった。」[28]

実際植民地とされた人々はどのように見られていたのか、如実に表しているのが「人間の展示」であった。

5．「人間の展示」―「フィリピン村」と「アイヌ人」

1）フィリピン村

セントルイス万博の展示の中で最も興味を持たれ人気を博したのが、人間そのものを展示した「フィリピン村」であった。それは、「フィリピンの群島の人々の生活、産業、米国の政策

について旅行以上に多くのことを一日で学ぶことができる。」[29]と評され、万博に訪れた人のほとんどが入場したと言われている。

「フィリピン村」の広さ47エーカーの敷地には、商業館、山林館、人類学館、織物館、教育館、農業館、武器館、兵営、マニラ土人部等が建設され、それら建物郡を取り囲むようにイルゴット族、ネグリト族、モロ族、ヴィサヤン族の集落が広がっていた。さらに外側には、米国士官の下での「教育」（＝教化）によって「文明化された」フィリピン人である警察兵の駐屯地があった。「フィリピン村」全体で、40の種族1200人の植民地住民が実際に居住し、見物人の奇異のまなざしを浴びながらフィリピン諸島の自宅と同じ生活を再現することを余儀なくされた[30]。

「フィリピン村」で米国人が最も関心を寄せたのは、犬を食べ、ほとんど裸で生活し、竹で作られた家に住むイルゴット族であった。「犬を食べるイグロット族、世界博覧会にてフィリピン人街の犬たちを脅かす。求む：健康な犬50匹。世界博覧会のフィリピン用地に届きしだい現金で支払。」と書かれた記事が、米国の新聞に次のように掲載された[31]。世界博覧会にいるイグロット族が、ここでも犬の肉を請い続けるのなら、このような「探し物広告」が日刊紙に挿まれるかもしれない。太平洋岸から出発して以来、彼らの奇妙な欲求が満たされることはなかった。彼らはタコマにある犬の抑留所から12匹の犬を受け取った。犬を乗せた貨車が切り離し用の線路に到着すると、お祭り騒ぎの合図となり、大きな深鍋と小さなやかん、大小とりどりの焼き鍋が用意された。12匹の子犬は２時間でなくなった。するとこの部族はもっと犬を送るよう強く求め、以来ずっとそれを続けている。

犬を食べ裸で生活するイグロットのイメージは、新聞の風刺画やフェアの公式記録の写真で米国内に広められた。「フィリピン村」の展示場で働いた米国留学中のフィリピン学生は、博覧会の印象を次のように述べている。「米国の人々はフィリピンについてほとんど知識がなく、博覧会場でイグロットを見物し、間違ったイメージをフィリピンに持った。フィリピンの歴史は米国より古く、衣服は米国人より古い時代から製作している。すべてのフィリピン人が犬を食べるイグロットと同じだと思っている。」[32]

２）アイヌ人

博覧会の人類学館長は、セントルイス万博の人類学上の展示は蛮族の人類及びその生活状態を実際に観覧させることを重視し、各種の蛮族を網羅することに努めているとし、日本にも「アイヌ人」の展示を求めてきた。「アイヌ人」展示の目的は「日本本来ノ土人（「アイヌ」ヲ云フ日本人ハ外ヨリ移住シ来リタル者ト爲ス）ノ工業上ノ発達ニ比シテ日本人ノ驚クヘキ進歩ヲ示サントスルニ有」[33]であった。

男性４人、女性３人、子供２人からなる「アイヌ人」は1904（明治37）年３月７日に通訳稲垣勇太郎とともに札幌を出発し、翌1905（明治38）年１月７日に帰国した。一行はいずれも日本服を着ており、妻は毛髪を垂れ口邊には入墨をし、両耳には大きな金輪を掛け又娘は赤前垂

を掛け日本語を多少理解していたようだ。博覧会社が往復の旅費、生活費、報酬を負担し、帰国した時には、各家族七百円以上の貯金ができたという[34]。

（図4　NINE AINOS WHO ARRIVED YESTERDAY AS THEY APEARED AT UNION STATION）

米国の新聞は、ユニオン駅に到着したアイヌ人の印象を次のように掲載している[35]。その風貌は、これまでセントルイスの街を歩いた人々の中で最も奇妙だったかもしれない。彼らは、多くの点で日本人と似ていたが、エスキモーを想わせる要素もあった。母親が子を背負って運ぶという方法は、アメリカンインディアンを連想させた。この人々は背が低く、ずんぐりした体型で、色が非常に濃く、全体的に雑然としている。最も印象的な特徴は、女性の口をぐるっと囲むように楕円形の入れ墨が入っていたことであった。

東京朝日新聞は、「今回の博覧会場内に人類学上最も有益なる出品は未開人の現状を観覧することであり、北海道のアイヌもその一人である。」[36]と述べている。

6．授業実践「20世紀初頭の世界を見てみよう！―セントルイス万博を通して―」

1）授業の目的と方法

「20世紀初頭の世界を見てみよう！―セントルイス万博を通して―」の授業は、「社会科教育法Ⅰ」の授業で2年生128名の学生を対象に行った。「社会科教育法Ⅰ」は、小学校の社会科の授業方法を学ぶことを目的としており、学生のほとんどは小学校の教師を目指している。授業は視覚的教材を活用し、歴史を多面的に学ぶことを目的として行った。

次期学習指導要領小学校社会では、歴史の学習について外国との関わりへの関心を高めることを重視して、「当時の世界との関わりにも目を向け，我が国の歴史を広い視野から捉えられるよう配慮すること。」[37]を加えている。

小学校6年生歴史の授業で、明治維新や日露戦争を学習後、1904（明治37）年のセントルイス万博を教材として、グローバル化している世界で、日本と各国の思惑、経済関係、国際交流の状況を具体的に理解する。セントルイス万博は日露戦争の最中に開催されたこと、これまでの万博よりも規模を拡大して「人間の展示」を行ったことで、アジア・アフリカが欧米列強により分割されつつあった現状や人種差別、日本の近代化について多面的に考察できると考える。

セントルイス万博の会場の写真や絵、ポスターなど視覚的教材や、万国博覧会に関する当時の米国や日本の新聞記事を見ることにより、1904（明治37）年の状況を具体的に多面的に理解できると考える。「人間の展示」は、会場に実際来て見た人だけでなく、新聞に記載された写真やイラスト、記事を通じて多くの人に印象付けたと思われる。

小学生の授業内容としては資料が多く、全てを使用すると理解が困難になる児童も多いと思

われる。授業は学生が教師として歴史的知識を得る、一次資料から歴史を考える、物事を多面的に見る、資料を精選して授業を行う力を身に付けることを目的として行った。

2）授業の導入

セントルイス万博の会場の写真（図5）を見せ、「これは何だと思うか」と尋ねた。写真は、万博のメーン会場のフェスティバルホールや機械館、ライトアップされた万博会場である。

学生の主な意見は次のようであった。

・テーマパーク・お城・博物館・美術館・フランスの街並み・どこかヨーロッパの国

（図5　FESTIVAL HALL）

意見を聞いた後、セントルイス万博に関する資料を配布し、日露戦争の最中に開催されたことを説明した。学生の多くは小学生の時に愛知万博を訪れており、自分たちが持っている万博のイメージと大きく異なり、これらの写真が万博の会場と聞いて大変驚いていた。

3）授業の展開と考察

授業は、多くの資料を提示しながら、ワークシートの①～⑩の問いに自分の考えを記入させた。書画カメラを使用し、写真やポスター等の視覚的資料を拡大し、細部まで見えるようにした。また見せた写真等は、黒板にすべて貼り、全体像が分かるようにした。

授業は以下のように展開した。

①「各国のパビリオンと資料を見てどう思いましたか。」―写真と資料から考察―

フランス、イギリス、中国（図6）、セイロン、オーストリアの政府館の写真を見せ、政府館の特徴や内部の展示品をまとめた資料を配布した。

学生の主な意見は以下のようであった。

・各国様々な自国独自の特徴があり、それがうまく建築物に表れていると感じた。見たらすぐにどの国か分かるように、その国のイメージに沿って作られている。

（図6 CHINESE　NATIONAL　PAVILION）

・自国の伝統工芸を展示し、他国に興味を持ってもらい、輸出拡大の狙いがあった。

・ヨーロッパ各国は建築物がとても多く、高い技術をこの時代に持っていたと思った。反対にキューバやアルゼンチンなどの国は天然物を展示しているため技術の差を感じた。

・当時の勢力図が表れている。

・国の代表的な物や世界に自慢できる誇りを持っている物が、展示物のモチーフになっている。特産物や工芸品・伝統品など各国の生活に密着した展示物が多く、その国に行かなくても旅行気分になれた。行ってみたいと思う。

学生の多くは、出展者側のメッセージや意向をくみ取っていた。

②「日本は何を展示したと思いますか。」―今までの学習から考察―

明治時代の産業や日本人の生活から考えるようにアドバイスした。学生の主な意見は以下のようであった。

・生糸・着物・米・お茶・日本酒・和菓子・和食・和紙・扇子
・歌舞伎・陶磁器・浮世絵・西陣織・版画・水墨画・盆栽・尺八
・天守閣・日本刀・鉄砲・甲冑・金貨・銀・大仏・仏像・侍や忍者の模型
・帝国ホテルの一部・富岡製糸所・自動車・蒸気機関車・電話

明治維新後の日本の貿易品を学習していたため、生糸や茶の回答が多く、外国人が好む日本の観光地や世界遺産の登録の影響から城や富岡製糸所の回答もあるなど、多種多様な物品をイメージしていた。

③「展示品と日本のパビリオンを見て、どう思いましたか。」―日本の資料から考察―

産業館の日本の展示場（図７）、日本庭園の写真（図８）を見せ、『聖路易参同事業報告書』からまとめた日本の展示品の資料を配布した。学生の主な意見は以下のようであった。

（図７　PART OF THE JAPANESE CLOISONNE EXHIBIT, PALACE OF VARIED INDUSTRIES）

・日本酒や醤油のような食べ物で外国の人たちの興味をひきつけ、味を知ってもらうことでこれからの交流も深めていこう。
・20世紀初頭からこういったパビリオンで世界各国の人々の目に届いていることから、現代でも世界の人々が日本庭園や日本を好んでくれているではないかと思った。
・日本のパビリオンは、他の国にない日本らしさがあり、風情があり、センスが良い。
・この時代からモノづくりが得意だったと思った。その技術が、現在もっと進化して

（図８　THE JAPANISE GARDEN）

いる。

・展示品の中には、今でも日本で活躍している物が多くあり、日本の象徴であり、伝統的なものが万博で展示されている。

・日露戦争の最中なのに、こんなに展示品を準備し建物にお金をかけて、大丈夫なのか。

工業力や庭園の美しさ伝統美などの日本らしさが現在の日本のイメージとあまり変わらないと言う意見が多かった。

④「米国の人は日本をどう思ったのでしょうか。」―米国の視点から当時の日本を考察―

米国の新聞に掲載された写真を見せ（図９）日本の展示品について述べた米国の新聞記事を配布した。学生の主な意見は以下のようであった。

（図９　GEISHA GIRLS FROM JAPAN AT IMPERIL GERMN PAVILION）

・日本庭園や金閣寺のような建築物は、他の国にはない独特な雰囲気を持ち、美しい風景。

・電気を扱う展示物や石炭などを見て、戦争への技術も蓄えている、これから発展する国。

・日本の女性に対して、しとやかで礼儀正しく、才色兼備、大和撫子という印象を持っていた。

・それぞれの分野で日本製品の精密さや、日本人の勤勉さを評価するとともに、飛躍的な成長に日本への警戒意識も見られた。

・米国の人は日本を対等に見ようとしておらず、上から目線で「まだまだ」と思った。

・他の国よりもシンプルであったため、貧弱。

庭園や着物などに大きな関心が持たれ、一定の近代化は進んでいるが、まだ発展途上国であるというのが一般的評価であると受け取っている。

⑤「この人たちはどこで何をしていると思いますか。」―「人間の展示」の写真から考察―

人間の展示の写真（図10）を見せた。学生の主な意見は以下のようであった。

（図10　NEGRITOS SHIITING BOW AND ARROWS）

・アジアの人たちが自然の多い森の中の一部で戦闘の練習か、弓矢で狩りの練習。

・アフリカ系の人たちに武器を伝え、教えている。

・アフリカの人たちが、警備的な人を守ること

をしている。警備員。

・アメリカに元々住んでいて、万博の為にその土地を追い出されそうになり抵抗している。

・パビリオンのスタッフ、パビリオンでショー、テーマパークで働いている。

アフリカの人という回答が多く、この写真では実際に何が表現されているのか想像できず部族の人形との回答もあった。

⑥「人間の展示についてどう思いますか。」―日米両国の新聞記事と写真から考察―

「人間の展示」について説明し、セントルイス万博会場内、人類学館に住まわされたアイヌ人の写真（図４）やインディアンの写真を見せ、フィリピン人やアイヌ人について報道された日米両国の新聞記事を配布した。学生の主な意見は以下のようであった。

・人間の展示は良くない。実際に生活している様子を近くで見られるという点では分かりやすいかもしれないが、人権的に問題がある。１日のほとんどを好奇の目にさらされることや生活をのぞき見されていることは当事者としては、耐えられないし、恥ずかしい。

・当時は黒人や黄色人差別が今より行われていたので、駄目な行為だと捉えていた人が少なかったと思う。

・人種差別が生まれる要因となり、その民族に対して間違った固定概念が生まれてしまう。

・貯金も出来たという記事から、アイヌの人にとっては臨時収入であり有難かったと思うので、プラスだったのでは。

・人間の展示をすることで、その人たちがどのような生活をして、どのように暮らしているが分かって良い。アイヌ人のダンスなども外国の人たちも見られるので良いと思った。

・しっかりした対価や給料が払われればショーとしてはよい。資料よりも伝わりやすい。

・人間の展示を今の日本で行えば犯罪になることだと思います。しかし、この時代で考えると私は賛成です。実際に人間が生活している姿、言葉などを見ることで、写真や説明で伝わらない細かい所まで理解することが出来るからです。

「人間の展示」に多くの学生が、ショックを受け許せないという感情を述べていた。一方テーマパークのショーの影響か、「人間の展示」そのものに賛意を示す学生の意見もあった。

⑦「米国はなぜ万博を開いたのか。」―今までの資料から米国の状況を考察―

学生の主な意見は以下のようであった。

・各国の文化、技術がどの程度進歩しているか知り、米国にその技術を取り入れるため。

・世界の国々の現状を把握し、米国が世界の中心であることを他国に示す。世界中の国々の有名な物や最新の技術を集めることによって、「どの国と仲良くすべきか、その国と戦う場合どうすれば、よいか」を考える。

・「人間の展示」を行ったのは、米国は他の民族を支配し、教育を与え、文化人にする力も持った強い国だと示ため。

・世界の状況を一度に見られ、世界情勢を知るため。
・米国の権力を見せつけるため。
・国際理解、協力して世界が一つになることを目的。
・万博で交流し、他国と親しい関係を築くことで、貿易の発達や戦争時などの協力に効果があるからです。

国力の誇示、貿易の増強、植民地政策の正当化、途上国を教育する力を示す、世界各国の情報収集と言う意見が多くあり、強国のアピールと万博事業の経済性に着目していた。

⑧「日本はなぜ万博に参加したのか。」―日米双方の資料から日本の状況を多面的に考察―

愛知県からも多くの人が渡米し今後の貿易の為に多くの知見を得たことが書かれている当時の日本の新聞記事を配布し、今までの資料と会わせて考えるように指示した。学生の主な意見は以下のようであった。

・日本ならではの技術や伝統芸能、工芸を世界の人に知ってもらい、日本の良さをアピールしたい。日本の伝統技能が世界の人々からどのような反応を得られるか、自国以外からの評価を得ることで、技術をより改善、発展、発達させていくことに役立つと考えた。
・米国に友好的な態度を見せて、味方につけるため。
・他国に日本の技術力をみせ、日露戦争など日本が戦争をする時に、勝つのは日本だと思わせ、味方につかせたかったのではないか。
・日本を含め、アジアの国や有色人種と区別される人はとても劣っていると思われていたため、日本は自分の国がヨーロッパ諸国と変わりないほど近代的になっていることを、ヨーロッパの国に認めさせるために参加した。
・他国の技術の発展や展示品の品ぞろえを観察することで、今後の国家間のパワーバランスや経済の移り変わり等の情報収集するため。
・世界のニーズを知り、それを取り入れることで貿易の利益を得ようとしている。日本の技術力を外国に見せつけることで、他の国からの圧力を跳ね返そう、近代化を他国に見せ、世界の中の先進国、大国になろうとして参加している。

日本は伝統や技術に自信があり近代化のアピール、情報収集、各国との友好関係を築くためと言う意見が多かった。

⑨「万博が果たした役割は何だと思いますか。」

今までの写真、資料から考えさせた。学生の主な意見は以下のようであった。

・全ての参加国がそれぞれの特色を見せて、名産を出していたので、いい宣伝になったと思う。万博は大きな参加型の広告のような働きをしていた。
・世界の国々それぞれの産業や生活を一度に知ることが出来るし、来場者の反応を見て、自国の今後の産業や貿易について役立てることが出来ると思う。一般の人が色々な国について知

る機会はあまりないと思うので、一般の人も世界に興味を持ったり知識を得たりする機会になった。

・「人間の展示」により、人種差別や教育の格差を見せ、大国の植民地支配を正当化させる理由を作る役割をした。更なる欧米のアジア進出に影響を与えた。
・万博では20世紀の各国が持つイメージを強烈に形成することが出来、国として大きな存在感を与えた。
・各国の多様な工芸品をアピールし、市場を広げる役割を果たしたのではないか。
・日本にとって西洋と交流を持つ良い機会となった。

万国博覧会によって各国の情報が一度に分かり、多くの国と技術・文化の交流が出来、貿易振興や自国の技術発展に役立ったという意見が多かったが、植民地政策の正当化という意見もあった。

⑩授業の感想

学生の主な意見は以下のようであった。

・万博をテーマとし、国の特徴がパビリオンから分かってとても面白かった。世界地図を見るだけでは分からない世界の様子が「歴史、地理、公民」の３分野から学べるため、とても興味深かった。関連させて教えることは、児童にとっても頭の中で回路が繋がるため、授業に「主体性」「創造性」があらわれてくると感じた。
・「人間の展示」というのはとても嫌だと思いました。自分が実際に生活を見られていたらとても落ち着かないし、嫌な思いもします。その当時、植民地とかの人がどのように見られていたのかを本当に端的に分かりやすく表しているなと思いました。このようなことが悪いことだと気づいて本当によかったと思います。
・今まで日本で起こったことや日本からの視点での日本での海外との関係しか知らなかったので、とても興味深かったです。また資料などを見ると、どの国であっても、自国をアピールするがために参加しているのかなと考えさせられました。ほとんどの国が自分たちのシンボル、世界には負けていないぞという工芸品などを展示していて、おもしろいなと思いました。
・万国博覧会という一つのテーマを取り上げていくだけの授業だったけれど、写真や資料から時代や背景や人々の考え方を考慮しながらどういう問題点があるのか、世界各国の思惑を想像し、根拠づけをしながら考えることが出来た。
・資料から様々な事を読み取ることで、20世紀初頭の世界各国の様子が何となくだが理解できた。日本が世界に進出していく過程の一部が見えた。
・歴史の授業は淡々としがちであるが、こんなふうに写真や資料をたくさん用意し、興味をもたせるような授業をすることが大切だと思った。

セントルイス万博を考察することで、20世紀初頭の世界の時代背景や大国の考え方の傾向などがある程度理解できたという意見が多かった。また、日本が米国以外の国をどう見ていたの

か、どう見られていたのか知りたくなったという意見も多く、時代の特色を多面的、多角的に学習したいという意欲も感じられた。

7．おわりに

セントルイス万博を教材とすることで、学生に育成したい力は次の３点である。

①歴史に対する深い知識と教材開発方法。

②視覚的資料の効果的活用方法（書画カメラと黒板の使用方法）。

③日米両国の資料から歴史を多面的多角的に思考し判断する力。

学生の多くは、ペリーの来航以降、日本は急速に近代化し、日清戦争、日露戦争、第一次世界戦争へと戦争の時代を突き進んだというイメージがある。「日清戦争や日露戦争、そして第一次世界大戦において、日本政府はかなりの程度、国際法を遵守して、国際協調に基づいて政策を決定して、国際社会の大きな潮流と整合した行動をとっていた。」[38]セントルイス万博の参加もその一つであった。万博の展示物を見ると、江戸時代から培っていた日本の技術が世界の国で高い評価を得ていたこと、現在の日本のイメージにつながっていることが分かる。万博の参加国は、それぞれ自国が見せたいイメージの展示を行っており、日本もどのような国を目指していたのか、展示物から理解できる。

ほとんどの学生が、今回特に焦点をあてて考察したセントルイス万博で行われた「人間の展示」に一番衝撃を受けていた。植民地支配や人種差別の問題を考える良い機会となったと思う。セントルイス万博の教材を活用することで、当時の新聞記事や写真から何の加工もされていない生の情報を学生たちは得ることになる。米国と日本の両方から発信した情報から、より具体的に当時の現状を俯瞰し眺め、帝国主義、植民地政策、人種差別など様々な問題に、より深い洞察力を養うことに役に立つと考える。

---

1 松村昌家『ロンドン万国博覧会と水晶宮―ロンドン万国博覧会（1851年）新聞・雑誌記事集成　別冊解説』本の友社、1996年、25頁。

2 板谷敏彦『日露戦争、資金調達の戦い』新潮社、2012年、106頁。

3 志邨匠子「日本画の装飾性をめぐるいくつかの立場―セントルイス万博における日本画論を中心に―」『女子美術大学紀要』1993年、13-33頁。

4 宮武公夫「博覧会の記憶―1904年セントルイス博覧会とアイヌ―」『北海道大学文学研究科紀要118』2006年、45-93頁。

5 伊藤真実子「1904年セントルイス万国博覧会と日露戦時外交」『史学雑誌』第112編第９号、2003年、66-86頁。

6 筆者稿「セントルイス万国博覧会と日露戦争―異文化交流の視点から」愛知淑徳大学『異文

化交流コミュニケーション研究 6 号』2003年、135-150頁。「セントルイス万国博覧会における日本の展示品と評価」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』2 号、2007年、135-147頁。

[7] 細谷雄一『歴史認識とは何か』新潮社、2015年、63頁。

[8] 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第 2 部）（国語、社会科、地歴、公民）」文部科学省ホームページ、129頁、2017年12月 9 日参照。

[9] 文部科学省「中学校学習指導要領社会」2017年 3 月、37頁。

[10] 復刻：永山定豊編『海外博覧会本邦参同史料（第 5 ）』フジミ書房、1997年、20頁。農商務省『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第一篇および第二編1905年。

[11] 筆者稿「万国博覧会の展示と世界観の形成―1904年セントルイス万博を中心に」『日本生涯教育学会論集28』2007年、 1 -10頁参照。

[12] *Scrapbook* , vol.12, p.115. St.Louis Public Library.

[13] 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告書』第二編、468頁。

[14] *World's Fair Bulletin* , vol. 5 , No.10, August 1904, p.8.

[15] *The World's Work,* 1904,p.5094.

[16] Ibid.,p.5148.

[17] Ibid.

[18] Ibid.,p.5152.

[19] *Scrapbook,* vol. 12, op. cit., p.123.

[20] Ibid., p.122.

[21] 「聖路易博覧会日本芸子の評判（上・下）」（ 7 月18日米国新聞所蔵として掲載）『東京朝日新聞』1904年 8 月18、19日。

[22] 「聖路易博覧会評（続）」（在米金子堅太郎男爵より農商務省に達したる手簡中にあった博覧会概評）『毎日新聞』1904年 9 月 9 日。

[23] 著者稿「万国博覧会と皇室」『愛知淑徳大学文学部・文学研究科篇35』2010年40-41頁。

[24] *Scrapbook,* vol.12. op. cit., p.135.

[25] Ibid., p.113.

[26] *Louisiana Purchase Exposition, St. Louis in 1904 : A Collection of Official Guidebook and Miscellaneous Publications,* Eureka Press, 2009, VOLUME 3 .

[27] 『セントルイス万国博覧会と日本　～公式ガイドおよび関連文献復刻集成～』（別冊日本語解説）大井浩二、11頁。

[28] 馬渕明子『舞台の上のジャポニズム』NHK出版、2017年、244-245頁。

[29] *The World's Work,* op. cit., p.5061.

[30] Breibart, E., *A World on Display : Photographs from the St .Louis World's Fair,* University of New Mexico Press, 1997, pp.51-52.

[31] St. Louis Republic, March 28, 1904.“Dog - Eating Igorrotes at World's Fair

Threaten Canines in Philippine Querers.”

[32] St. Louis Republic, Auctober 2, 1904, “Filipino Student Bewails Ignorance of Americans”

[33] 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編264-270頁。

[34] 『東京朝日新聞』1904年 9 月 1 日。

[35] *Scrapbook,* vol. 7, p.133. St.Louis Public Library.

[36] 『東京朝日新聞』1904年 8 月23日。

[37] 文部科学省「小学校学習指導要領解説社会編」2017年 9 月16頁。

[38] 前掲『歴史認識とは何か』271頁。

図 1．*Louisiana Purchase Exposition, St. Louis in 1904 : A Collection of Official Guidebook and Miscellaneous Publications,* Eurka Press, 2009, VOLUME I．

図 2．*Scrapbook,* vol.12, p.138. St.Louis Public Library.

図 3．*Louisiana Purchase Exposition, St. Louis in 1904,* op. cit., VOLUME 3．

図 4．*Scrapbook,* vol. 7, op. cit., p.133.

図 5．TIMOTHY J. FOX and DUANE R. SNEDDEKER *FROM the PALACES to the PIKE : Visions of 1904 World's Fair* Missouri Historical Society Press, 1995, p. 1．

図 6．*Louisiana Purchase Exposition, St. Louis in 1904,* op. cit., VOLUME 4, p.286.

図 7．Ibid., p.311.

図 8．*FROM the PALACES to the PIKE,* op. cit., p.177.

図 9．*Scrapbook,* vol.12, op. cit., p.125.

図10. Breibart, E., *A World on Display : Photographs from the St .Louis World's Fair,* University of New Mexico Press, 1997, p.52.